

① B群の個体数がC群を上回った要因を説明しましょう。

B群の出産数はほぼ見込み通りだったが、C群は見込みを大きく下回った。

② B群の勢いが増した要因を説明しましょう。

B群の雌に興味を持ち両群を行き来するC群のボスにC群の雄が気を使い、B群に抵抗しづらくなった。

③ なぜC群が「存亡の危機」といわれているのでしょうか。

C群が02年に消滅したA群同様、寄せ場に下りることができなくなる可能性があるから。

高崎山C群 存亡の危機

個体数、B群が初の逆転

大分市は27日、高崎山自然動物園でB群の個体数が、2群体制となった2002年以降、初めてC群を上回ったと発表した。C群は今シーズンの出産数が少なかったことに加え、αオス（ボス）がたびたび群れを不在にし、B群が勢いが増したことなどが原因とみられる。C群は寄せ場に姿を見せない日が増えており、消滅する恐れも出てきた。

調査の結果、B群は前年比26匹減の706匹、C群は同131匹減の659匹だった。近年増加傾向だった総数も、157匹減った。両群とも100匹程度の出産を見込んでいたが、C群で実際に生まれたのは32匹だった。B群は99匹生まれた。

C群には英王女にちなんだ名前で話題になった「シヤロット」や今年初めて生まれた「リオ」といった人気ザルが所属する。今年5月にボスになった「オオムギ」はB群の雌に興味を持ち、両群を行き来する生活を送る。ガイドの藤田忠盛さんは「C群の雄がオオムギに気を使い、B群に抵抗しづらくなった」とみる。餌を与える園内の寄せ場では今月に入ってから、2日に1度ほどの頻度で、B群がC群より早く寄せ場に姿を見せるようになった。寄せ場に出るのは勢力順とされ、過去になかった事態。02年に消滅したA群同様、寄せ場に下りることができなくなる可能性もある。C群が姿を見せなくなれば、

B、C群の個体数の推移



来場者数への影響も懸念される。園は群れの勢いを見極め、春以降に勢力が逆転したかを判断する。
(井上有紀子)

今年の調査は11月28日、12月9日に実施し、山の中で園職員らが両群の数を数えた。市はサルが山の樹木や周辺の農作物を荒らさないよう、適切な数を両群で計800匹とし、避妊手術などをして総数抑制を進めている。